

鷺水の新出浮世草子『初音物語』
— 翻刻と解題 —
(卷一・四)

藤原英城

はじめに

本稿は浮世草子作者として宝永期を中心に活動した青木鷺水の新出浮世草子『初音物語』の翻刻と解題である。

題

十三才)、半丁二面(十才)。
原題簽(卷一のみ一部存、卷四は欠)。子持左肩、茶色無地〔題初(以下落剝)〕。角書は団扇文様。縦一一・〇糎横二・六糎(卷一、剥落跡)。

序 題

目 録 題

〔書誌〕
初音物語 刊本 小本 四卷二冊(卷二・三欠)

表 紙 縹色無地、雲霞に秋草渋引模様原表紙。縦一五・三糎横一一・〇糎。

内 題

「初音ものかたり卷之一(四)」。
尾 題 「初音ものかたり卷之二」「初音物かたり卷四終」。
板 心 序「ハツネ卷之一序 丁付」、目錄「ハツネ卷之一目 丁付」、本文「ハツネ卷之一(四) 丁付」。ただし、卷一「九」下部の「〽」、卷四「四」上部の「〽」なし。

本 文 四周単辺。縦一二・九糎横九・三糎。半丁一〇行毎行二 二字前後。

句 讀

「〇」と「●」が混在。

構 成 卷之一 一七丁(序一丁「乙」、目錄二丁「一、二」、本 文一四丁「一〜十四」)。

作 者

青木鷺水(改竄・編集者、「備考」参照)。
白梅園鷺水。
序 者 未詳(吉田半兵衛風)。
画 者 京都大学大学院文学研究科図書館(国文学/Pe/8
挿 卷之一 見開三面(二ウ・三才、六ウ・七才、十二ウ・ 十三才)、半丁二面(九ウ)。
卷之四 見開三面(二ウ・三才、六ウ・七才、十二ウ・ 二)。

刊 記 「宝永四歳／亥仲秋吉祥日／武州／万屋清兵衛／洛陽／

西村市郎右衛門／梓行」。

諸 本 底本のみ。

備 考 本書は『浅草拾遺物語』（貞享三年正月、洛下旅館序・刊）

の新補・改題改竄本である（〔解題〕参照）。旧板本の使用以外に以下の箇所新補・覆刻が確認できる（なお、『浅草拾遺物語』巻一「十四」以下、巻四「十一」以下は欠丁のため不明）。

【新補】序・目録・本文章題・本文（巻一の一「一〜四ウ（八行まで）」・挿絵（巻四「二ウ・三オ」）。

【覆刻】巻一「四ウ（九〜一〇行）」「九〜十三」、巻四「二・二オ・三ウ・四・六」。

〔梗概〕

（巻一・一）大和国宇田の国見山の僧玄光は六十六部となり善光寺に向かう途中、上州駒場村で腹痛のため宿を借りるが、宿の主は請人となった奉公人が逐電し、その責を負って明日までに田地を売り渡さなければならぬことを語る。玄光は法事のために預かった金百両から手当を施し、主夫婦を助ける。翌朝、主が玄光の寝間を覗くと、玄光は殺害されていた。女房の金目当ての犯行であった。その後主はまもなく病死したが、女房は人面瘡を発症し今も長らえる。

（巻一・二）京の吉祥院の開帳の折、遊山客が池で釣りをしていると大蛇が現れ、石を投げつけると浮藻や脱ぎ捨てられていた草鞋などが

蛇に変じ襲いかかってきた。驚いて在所の者にこの不思議を語ると、そこは神の御池で、その池の魚には神の御紋があると言う。しかし、釣った魚には紋はなく、大笑いして遊山を続けた。

（巻一・三）長崎の金持ちの次男成田元齋は京で医者修行をしていたが、松風という遊女に馴染み、零落する。しかし、松風は世話を欠かさず、元齋帰国の折、落ちぶれた姿を揶揄された無念さを語る元齋を慰め、松風は心尽くしの旅支度を施す。帰国した元齋が松風のこれまでの情けを語ると両親は感じ入り、松風を請け出して嫁とした。

（巻一・四）武蔵野の向の岡を訪ねる途中、人間の宿での茶飲み話に老女が次のような不思議な話を語る。元武士の宮尾何某の一人娘が十六歳のある夜、夢に白髪の翁が現れてこの菓^{このみ}を食べよと言う。目覚めると珍しい菓が置いてあり、それを食べて以来娘は菓だけしか食べなくなつたが、ある夕、忽然と翁が現れ、娘を連れて消え去つた。三十年後、この娘が当時の姿で向の岡で草花を眺めているのが発見されたが、すぐにまた消えてしまった。娘は仙術を得たのだろうか。

（巻四・一）京の醍醐山を巡り、栗栖野の旧友の宿で主が次のような話を語る。去る頃、化生がこの辺りに出没するとの噂が頻りであったが、何某の六右衛門が通りかかると青ざめた大法師や一つ目の女、恐ろしい老女、美しい若衆などが現れる。さらに化粧をした尼が出現したところで切り付けたが、夜が明けてみると、道端の石仏に刀が刺さっていた。その石仏は靈験あらたかで参拝者が絶えなかつたが、祈念する者たちの執心が宿り、それらの化生となって現れたのであった。それ以後、参詣者は絶え、変化^{へんげ}も止んだ。

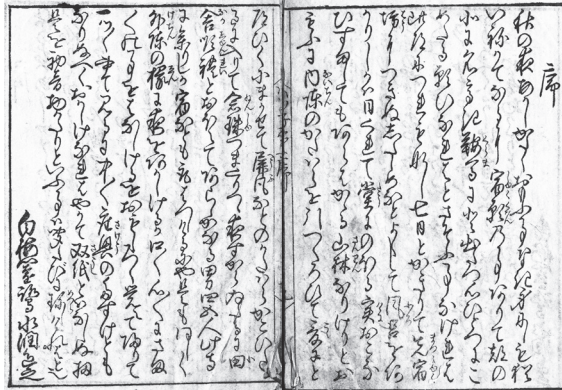
(巻四・二) 妻の一周忌に剃髪して、善光寺や関東の名所を巡った男がさらに高野山に詣でての下向の折、女郎花の盛りを見て「花さくな爰は高野ぞおんなへし」と自慢心に発句を詠んだところ、小さな僧が忽然と現れ、句のせいで花が萎れてしまったことを非難する。僧が上五文字を「名をかへよ」と改めて吟じたところ、花は再び咲き誇り、僧は消え去った。遍照金剛の慢心の戒めとありがたく、男は下向した。(巻四・三) ある難波男が妾三人・舞子二人・太鼓持ち五人・さる方の娘一人を伴って伊勢参りに出かけ、道中その娘を口説くが叶わない。松坂の宿で昼から蚊帳をかけ、妾・太鼓らと戯れていたところ、男は急に狂乱し、難波に送り返される。神明のあらたかなこと、ありがたきことである。

(巻四・四) 美濃国の名所を巡り、笠縫の里に至る。そこに何某の平内という孝行息子の百姓がいたが、ある夜、夢に白髪の翁が現れて不老不死の良薬である天の莠草ほうちうを与え、門田に植えよと言う。目が覚めると珍しい草が置いてあり、それを植えると一月で成長し、老親に食べさせたところ、顔色若返り、聡明叡智、不思議な能力が備わるようになった。噂を聞き付けた者たちがその苗を盗むが、何の靈験も現さなかった。親子ともども富裕となり長生で、笠縫の親子翁と呼ばれた。

〔翻刻〕

一、翻刻にあたっては、原則として現行通用の字体に改めた。ただし、当時慣用と思われる漢字表記などについては、そのまま残したものである。

- 一、丁移りは、丁付と表・裏(オ・ウ)を括弧に入れて示した。
- 一、誤字・衍字・脱字等の不体裁については(ママ)と注記した。
- 一、句読点は「〇」に統一した。



序

秋の夜あかしかたくおもふ事なき身にしも猶いねかてなるに宿願しゆくはんの事ありて都の北に名高き鞍馬くらまにと出たつ心ひとつにこめたる願ひなれはとさそふ事なければ此道につれもなし七日とかきりて先宿坊ましゆくぼうにつきぬした、めなどよくして風呂ふろをあかりしかは日くれて堂どうにのほる実けおこなひすましてもあらはか、る山林さんりんなりけりとおもふに内陣ないじんのかたはらを引つくるひて爰こゝにと(乙オ)道みちひくにまかせて屏風へんぷうなどのかたはらかこひたるに入りて念珠ねんじゆつまくりつ、夜すからあたるに田舎順礼いなかしゆんれいとおほえてあら、かなる男四五人此寺に参りしか宿なども取はつしけるにや是も同じく外陣けちんの椽えんに夜をあかしけるか口く心く(に)さまくの事をはなしけるをおもしろく覚えて帰りて一ツく書て見るに中く座興ざきやうのたすけともなりぬへくおかしけなればやかて

双紙さうしとはなしぬ扱あつか是を初音物かたりといふ事は聞たきびに珍めづしければと也

白梅園鷺水潤色之(乙ウ)

初音物語卷之一 目錄

- 一 駒場村の勇女こまばゆうぢよ 上州にて六十六部の僧を殺せし事
- 二 吉祥院の神池きぢやういんかみいけ 神のたゝりはあらたにけうもある事
- 三 遊君の貞節ゆうくんていせつ なさげに感かんして夫婦となる事
- 四 食を断女しやくをたう 魔にとられしむすめの事(一オ)

卷之二

- 一 小太刀の感応こたちかんおう 鍛術けんしゆつの妙めうを人形にんぎやうに習ならひし事
- 二 青龍ちまたを去せいりゆうちまたをさる 仏法の威力ぶつぽうのゐりまてあらたなる事
- 三 月に名あり広沢ひろは 念はさしとほすかたき首くび

卷之三

- 一 遊行の法とんぎやう 世にいふいつなつかいの事(二ウ)
- 二 色に招る、女島いろにまねが、をんなしま つりはりによる情なさけの品しな
- 三 身かはりの観音みかはりのくわんおん 山口何かし後の月見やまぐちのちのつきみの事
- 四 農民地子を養のうみんぢやしやし かみなり恩おんをむくひし事

卷之四

- 一 一念のやいばいちねん 石ほとけの妖怪いそくはいある事
- 二 心より見る草花の妖こころよりみるさうわのよう さとれば仏まよへは衆生しゆじやうといふ事(二オ)
- 三 太神宮の奇瑞たいしんぐうきすい 神のたゝりにて気きかひし事
- 四 孝かうあればはしるしあり 富貴長命ふつきちやうめいの家の事(二ウ)

初音ものかたり卷之一

①上州駒場村の勇女

大和国宇田やまとのくにうたの国見山くにみの僧玄光さうげんくわうとかやいひしは六十六部むの経きやうおさめん
とて見もしらぬ国くにに笈つえをひき尊たふとき宮寺みやでらに爰おいをおろしおかみめぐりて
此度このたびは下野しもつけに至いたり日光山にっこうより上州じやうしゆを経て信濃しなのなる善光寺ぜんくわうじおかまはや
の心こころ催もよほされて先上州まづじやうしゆに至る所富田とみだより犬いぬふし迄ほどの内うちにて腹はらのいた
みしきりなりしかは駒場村こまばむらとかやいふ所ところに宿しゆくをかり日高ひたかきに足あし
をやすめ葉くすりなとたうべて泊とまりけるに此こゝやとの主あるしとおほし(一オ)き
も病人びやうにんとみえて色いろわろくやせつかれたるものなとくふ体ていもなく打
ふせりたるを女房むすめも其かたはらを離はなれすとも物思ものおもひ貞かほなりしを
不審いしかかくて玄光げんくわうか懐ふせうに入いりて持もたりし葉はなともしやと取出と出してあたへん
とする時彼男かの語りけるはいざとよわれすこしも病やまいありて煩わづらふ二にあら
すわれまことは人の請うけにたちて佐野さのの町まちに奉公人ほうこうにんを出だせし事あり此奉

公せし男主人の銀をぬすみてある夜ちくてんし侍りわれ其もの、請に立しゆへ盗人の債をこたくわれに仰てすみやかに納所すへしと日を切て奉行所（一ウ）より仰をかうふり侍りはやすてに日限も明日にせまりぬ彼者のきるい吾すこしの田地を人に売などして此おい物を見るに猶受おいたりし金式歩の不足あり此ふそくはよしわひても済へけれどもことく田地を人にとられしうへは朝夕のけふりたちま



ち絶て妻子やしなふに力なし所せんいきてもかひなき命也いまはふう婦ともに路頭に袖をひろけ乞食の身とならんよりははいかなる海河にも身をなけむなしくなるへきに思ひつめたりさりながら凡夫とていまた輪廻のきつなはなれかたく哀何とそ今一度世にもありたき（二オ）



ねがひにのみ心まとひありて涙をこぼし去とも心つよく思い給へおよそ人を助くるは出家の態夫ほととの事はたくわへたれば其方の命をすくふべしとて奥州向寺町と云所より高野山に渡し法事させ給とてことづかりし金百兩の口をほときも施の一つなるへし

第一 図

挿絵第一図（二ウ）

挿絵第二図（三オ）

ねがひにのみ心まとひありて涙をこぼし去とも心つよく思い給へおよそ人を助くるは出家の態夫ほととの事はたくわへたれば其方の命をすくふべしとて奥州向寺町と云所より高野山に渡し法事させ給とてことづかりし金百兩の口をほときも施の一つなるへし

能善根をもちしけると心多みしてとらせぬ夫婦はあまた、ひ悦拜みてさまくど地走しつ、よふけしかば各寝たりやうく夜も明かたに近く成ま、に此亭主ふと目さめていかにそお僧の今朝はとく宿をた、ん（三ウ）など、仰られしか若おきさせ給ふか知らすせめての御恩に馬にても参らせはやとて逗留はしたまはしなど独こちてお僧の寝間をのそくに何者の仕わざともしらすかのお僧の寝首は鎌のはにかけてし、切おとし其あたり血にまみれたるを驚て急女はうをおこ

し此事をかたるに女はさのみおとろきたるていもなくそれも吾御前をすくい給ふなるそ隠て取おき給へ金のおひた、しきを見ながらぬけくど只はかへしかたく吾せしそやとかたれば夫今はけうさめいか、はせんとあきれいたるに女は少もおそれすか（四オ）いく敷とりかくして死かいは裏なる敷かけにうづみなどして何のけもなき顔つき見るに心うくつみのほともかなしくておもひなけきついに夫はこれを病にしてその年むなしくなりぬ女はうはそれより四十日余り過て背中に人の顔したる瘤出来て目はな口ありくどそなはりひたと食おこのみてうづき痛つ、今になからへてありとぞ

◎吉祥院の神池

宮古の南東寺村の西に吉祥院といふ宮寺有もと菅家の氏寺にてむかし菅丞相時平の（四ウ）大臣の讒によりて筑紫の安楽寺へおもむかせ給ひしにも。先此所へ詣て給ひ。よろづ御祈誓し給ひしとかや。此所の吉祥女はれいげん他にことに。人あゆみをはこぶ。さいつ比開帳の事ありて都鄙の老若袖もちぎらず。宮古より遠からぬほどなれば。

余情おとこ伊達おんな駕籠のり物の置ふとん紅紫の色をまじへ弁当もちが這く声かしましく。是にうきたち友とする人ふたりみたり釣針に扇あみ。ひやうたんに酒とりいれて行ば。ある(五オ)池の流れ川の清くたるに小鮎はい山のごとく是に心とられて。皆つり針をおろせば。魚測におどるといひしもかくや。罪もむくいもわすれて。弓手を見れば。ちいさき宮のある石の下より大きな蛇のかしらをあげて人を見る貞。つぶてとつて打つければ。ちいと鴻声の下にあたり石かけ浮藻。草のかけぬぎ捨たるわらぢ迄。ことくぐ蛇となつて追かくるに。気もたましひもなくはしりあがりても猶此事ばかりおそろしき。あたりの在所に入て。かうく(五ウ)事のありしといへば。牛に草かふ夫が聞てそれこそ此所の神の御池にてかりにも釣する事のなきをしらせ給はでも神のとかめはかくぞかし此池の魚には則神の御紋すはれりといふにとりたる魚を見れど其事もなく。是計はおかしく大わらひして釣とりし魚を皆もとのいげになけ入



第三図



第四図

まことかとひねくりみれは神池のうをには波の紋もない

こと

とよみ爰にやすらひてもたせたる提重ひやう(七オ)

挿絵第三図(六ウ)

挿絵第四図(七オ)

たんにこはさ忘れて山寺の春の夕ぐれとうたへば。ちかき寺よりつきいだす入相のかねに酒ぞへりける

③遊君の貞節

あすか川のふちせ頼まれぬ物からきのふのなさけもけふにかはる人心。ゑりつきに情して金銀にぬる、は大ぬさの引手あまたの身としりながら。後のあしたの文に御しゆびのほどいかえにしあらば。又の御げんおと書こしたるまぢかねてふうじもせぬ堅文よむも。う(七ウ)れしくたひかさなれば。はやせめくる御ゆかしさのといひこしたるに。絶べくもなくかよひて。初のほどは偽のなき世なりせばとこそおもひし。後には実事になりて誠の女房のごとく一向恋のやつことなり行事ぞかし。いつの比ほひにか在けん長崎のあるかたの二番むすこ成田元斎とかや親は金銀山をつきても。万貫目の望たへず。九重にのぼして医門の窓に素難本草をさぐり。あるは君臣佐使補瀉温涼の品薬を正して倦ざりしが。人は善悪の友ちどり(八オ)いく世といふ女郎にかよふ男恋ざとのしるべせんといふに。さそふ水あらばと日比おもひ川の渡りに船の心ち。松かぜといふ君になれて。三とせは昨日の夢にかよひて久米のさら山更く我名はたてじとおもひしも。いつとなく。格致大成は擔子のすみに煤をかさね机には時付の文道祖神



と書たるより外なく。国もとの上り金も是がためにいれあげ。書物は六つとひとつや五に預てありし姿は紙子に日の、ほそき帯ばかり此ありさまを聞ても。猶女郎のかたより毎日の付(八ウ)と、けむ

かしにかはらず。是をいのちと頼うかゝの月日も暮て国もとへ帰る比一銭のたくはへもなく此身は何となら坂や手のかゆき事ばかり。よしや此姿なりとも。今一たび松風に此世の名残惜てにもかくにもと。古あみがさに昔隠して行は格子くあげやく道中の女郎に見つけられじと。ある軒にた、ずめば。むかひなる二階より見つけてかふるに短冊もたせこしたるみれば

松かぜに吹あげられて大臣は
紙子姿になりた元齋(九オ)

挿絵第五回(九ウ)

此無念さも。此上からはとむねをさすり行はある揚屋より松風此姿を見て限なく悲しき。かふるをして一間のかたにいさなひいれ。是は抑聞しに増る御おちぶれと涙たもとをひたせしが今日しも田舎の客にあげられ。ま、ならぬ身をとやかくともらひ身あがりして。其夜の情むかしより猶いやましに。こしかた行すゑかたりつゞくれば。ふところより彼たんざくとり出し。男なきに泣太夫に今一たび逢よしもがなとつれなき命ながらへぬ。今ははや是迄といふを押と、め

て扱もみじ(十オ)かき御心一まづ御国へ下りあつても猶御しゆびの宜からずは。自も友に思ひ定申さんにとなくさめかたらふほどに。あたりの鳥の声せはしく。恋しらずのかねが別れをいそげば。人良もあらはのしの、めにならぬ内にと。出て道迄送り。やがてめたふ御たよりあれさらばへと小手招もほど行過れば。姿も見えず。互の心の此かなしき。其またの日太夫のもとより。ことづてこしたる文こましくちいさき風呂敷包にふうつけし開ば旅ごりのうるはしきに。いろくの心つけて。つげの三つ櫛(十ウ)定紋もうれし。香包の内をみれば。伽羅にまじりて壱歩弐十。養性の丸散やいとのと。いへかうやく迄此こ、ろざしのふかさ其日に旅立して国もとへくだり此情をかたり是ならで我やどのつまとすへきものなしといへばうき川竹のなかれの身に又なき心貞女とも心中とも。めづらしきおんなど。父母のゆるしをうけて。此うれしさ彼女郎うけ出して二世のちきりをなしぬ其中の浅からぬ事まことにすゑの松風波はこすとも

④食を断女(十一オ)

行すゑは空もひとつのと読しむさしのに来てみれば。其間五六里がほと皆野にして荻す、きの露をわくれば。此あたり実月の入べき山もなくて。行こふ人の。小人島のごとく見ゆるは。所のひろきからの故なるべしと詠もて行は春ならぬ霞が関

おなじくはかねをかすみが関もがな
借錢乞をしはしとゞめん

と去すり切のよみしも大晦日の事と思ひいて行ば。むかひの岡とかや。

其ほとりの古跡詠（十一ウ）尋行に喉かはき出れば。茶ひとつと思ひ人間の宿につきぬ。ある家にやすらひたはこの火もらひけるつゝて此あたりの古きあたらしき事をたづねきけはあるしは七十計の老女の世のつね虚などはいふまじき後世者とみえて麻苧をつむぐかた手にも珠数つまぐり気なるか。かたる扱も此さとにふしぎなる事のありし。宮尾何がしといふもと武門につかえし身なりしが。ゆへありてむさしあぶみさすが小刀鋤鉞にかへて。ひとへに農民のわざながら。まだむかしの名残有（十二オ）

挿絵第六図（十二ウ）
挿絵第七図（十三オ）



第六図
て万つたなからず。ひとりのむすめとしは二八の比にてかたちあてやかに此所にての美女其情のいろのふかきに東ゑびすの賤の男も是に魂とられて。かよふ玉づさにし木、の千束になれば立なから朽なん事をなげくもの多し。ある夜娘、怪夢をみる。たとへば白髪のお翁来りて此菓をたうべよ。行末ふしぎあるべしといふかとおもへば夢さめぬ。此ふしぎさ臥

第七図
たるあたりをみれば。あやしくめなれぬ菓あり是を味はふに類べき物なし天の甘露とはかくや。是より飯食を忘れ（十三ウ）一向菓をあつめ喰ける。栗くふ娘のありしとつれづれに書しもかくや。是よりこそ人恋草の根を絶て音づる、ものもなかりしある夕月のさし出たるに夫婦娘いざなひて。詠出たるに独の翁忽然と顕て此娘を招にツイ立て行と見えし跡かたもなく。夫婦悲しみて国々所々尋れど行かたもなく今はや三十年になりぬ。去し月の朝まだき。彼娘此向の岡に咲出る草花にうつ、なく詠居るをみれば。十六計のかたち其俣に猶うつくしきすきとほりて衣通姫の古しへもかく（十四オ）やとあやしき急ぎ親のもとへ行て。とし比尋給ひし娘こそ向の岡にと告て帰る其間にかい消て見えずなりぬおもふに此娘仙術を得けんあやしむさしなるむかひの岡にたつむすめ

伯父やおやぢの宮尾とかめぬ

初音ものかたり巻之一（十四ウ）

初音ものかたり巻之四

①一念のやいは

醍醐山は宮古のたつみにあたりて。四方に山をかさね。老木枝をつらね。日かけさへおぼろに露草露ふかうして。誠に世をのがれん人此所にとほそをしめなばと。其わたり遊行するむかし釈の聖宝此山にのぼり。密教をひろめん事はかり給ふに。薪はとほしからねど水の

かすかなるをなげき思ひて尋めぐるに。清くたる泉の流を見出し。手にむすび是をなむるに醜味たひごみには(一オ)らしとてよつて所の名とすと。いとたうとく上山山下の堂塔坊舎拜めぐり。猶西につゐてひとつの川を越るにみわたせば若なつむへくと長方朝臣かたあそんのよみ給ひし栗栖野くりすといふ里につきぬ此所にしれるむかしの友ありて一夜を明す。時しもこそあれ。てもせず曇くもりもはてぬはるの夜の月雲にかくれ小雨さめそぼちくれは。いとさびしきやどに蕎麦そばがゆなど。ひなのもてなしに夜も半なかばの比。あるじつれくをなくさみの物かたりする扱いんも去じとしの比此所に化生のものいで。日も(一ウ)暮ればおそれおの、きて。道行人も稀まじにたゞ此事を号のしりやます。其比宮古より此所へかよ



ふ何かしの六郎右衛門とかやいふ人。急用きようようの事ありて。此図うしろの松の茂たる道を行八やちに。怪あやし青き火あつて頂こずへの梢すえにとまる。ひかりにつゐて見あげたれば六尺計の大おほの法師ほふしいる青ざめておそろしき朝日のごとき両眼かみに血ちをぬそ、ぎたるが。まじろかず男九をにらむに元来もとよりふてきの男。第十是にすこしもおそれず。抑おさいかなるものなればかくあやしき姿あはばを顕あはすととはれてかき

けちてうせぬ其跡に(二オ)

挿絵第八図(二ウ)

挿絵第九図(三オ)

一目の女来りてしきりに泣な其声こゑいはれぬ。あわれさ骨髄こつぱいにとをつて覚ゆるを。猶おそれずながめ居れば。是も消きて失なぬ。其跡あとより老おいたるうばのおそろしき。或は若衆わかしゅのえもいはれぬうつくしき皆ものをもちはず幻まぼろしのごとく顕あはれ。あらはれては消きる。よのつねの人ならば魂たましひも消身きへもふるひて人心こころちもあるまじきを。猶おそれずあゆみ行に大きな柳やなぎのかげに白粉はくかんいつくしく。けはひしたる尼あまのかね黒くろく。つけたるが。此おとこを見て完々じじくとわらふ。此時さしたる脇指わきさしぬひて。とびか、(三ウ)りさしとをし押おふせて。とかくする比。里さとのくだかけ。こゑ幽かすかにし、めしろくなり行にみれば。道のはたなる。石仏いしぶつに。きつきさ二寸計にじゆんけいさしこみてをさへ居ゐたる。とらと見て石にたつ矢もとよみしむかしもかくや打捨うてて行。さとのはなれに臥居ふしたる乞食こつじきを引おこし。かゝるばけ物にあひぬと。石仏いしぶつのふしぎをかたれば。されば此石いしは靈験れいげんあらたにましますゆへ。近在きんざいのまふでたゆる事なく。けふもまふでたる人男女四人といふに。おもひあたり。して其詣よたるものは。いかやうの人成なりしととへば。乞食こつじきゆび(四オ)折ひて先登まへのほまじりたるは。色青いろあざざめたる法師ほふしの四十はかりなる。其次は片目かための女何やらん泣なわめきて夫の事を祈いのる。其後は六十計のうば。美うつくき若衆わかしゅとかぞへたる聞きば。まさに見しばけ物にゆめ計もたはず。思おもふに此石いし仏ぶつに信しんをこらし祈詣いのりまうる輩ともがらの執しゆ仏ぶつにと、まりて。かゝるふしぎはあらはすなるべしと。里さとに出て此事このことをかたりけるに人々ひとびと驚おどろ是こゝより詣よする

人もなかりければ更に又あやしきすがたも絶て出ざりけるとぞ

①心より見る草花の妖（四ウ）

恋衣又たび衣かさねきて名にしあふ。みやこは更に。なにはの新町。江戸のよし原。其外の恋のふちせ。うかゞひみるに。にくきはひとりもなく皆ほどくの情はあれど。ぬれにぞぬれし色はかはらずと。よふ合点して女房に内を守らせ。男は外をつとむる物と孔子風のいで来るも漸々四十あまり馴染ば是もさすがまた誰まことより女房そめけんと。いつしか是にうつりて。



よそのふり袖もおかしから
図ず。たまゝかのさといざ
十なわれても。一ひやうしぬけ
第てむかししのお（五オ）のこ
ひもなく。たゞ一向の内氣と

なりて。連理のうき世御座を
第十一図
ならべ。ひよくの夜衣の袖を
かさねて互にふかきいもせ川
水もらさじといひしも。世の
はかなきためしの今更にはあ
らねど。かりそめの心ちとい
ひて。此妻うき世をはやうし

たる。此かなしき。つるに行道とはかねておもひながら。きのふけふとはおもはで。むねふさがり手も足もしびる、ばかりなげきおもひし

日も月も。夢の内のゆめとくれて。一周忌の其夕日比おしかりしうば玉の黒かみを剃。一門のかたゝへ（五ウ）心さしの書置した、めほしあへぬ衣のやみにかきくれて

心の月をたつねいてぬる

とよみて此初に善光寺にまふて。東の名所詠めぐり。あくるやよび比は高野の御山へと心さし行。昔より世を捨し人。皆此所にこもりて心の霧をはらひ真如のかけを見し事思ひ出行は玉川の毒水御廟のはし。是より左右皆なき人のしるし計哀に。末の露もとの雫のごとく我が身もいつかはと無常もひとしほに。院々谷（六オ）

挿絵第十図（六ウ）

挿絵第十一図（七オ）

／＼ 拝みめぐる。下向の折からある草村にやすらへば。うつくしき女郎花のさかり。我おちにきと人にかたるなどいひし僧正遍照の昔おもひ出て発句す

花さくな爰は高野ぞおんなへし

女人ののぼる事なき山なれば。心なき草木とてもおんなへしといふからにはと。句作り自慢心に。再吟し居ける比。いつくもなくちいさき僧の忽然と出ていふ。其かたには和哥一躰を学び。物のあはれもしれる身の。花さくなとは。かく情なき事やある。是（七ウ）見給へと指さすに。今迄うつくしかりし花しほれてふくめる露の哀げなる。草木心なしとはいへどかゝるふしきにむねつづる、計。其時僧のいふ此句まことに作意はあれど。五文字のつたなきにてふしぎをあらはし侍るなれば。上の文字をかへ給はんにや左もあらは深妙の句なるへしと

ある。ともかくも御僧を頼奉るといひもあへぬ。

名をかへよ爰は高野そおんなへし

と吟し給ふ。有がたき五文字再吟すれば。花うるほひて咲がこと
く蒸せる粟のことしといひし。猶いや(八才)ましにながめ居れ
は。ありし僧はかきけちてうせぬ是たゞ遍照金剛のあらはれ出まして。
かりにも慢心を示給ふと。有がたく一入の信心をこらして下向道に
おもむく

③太神宮の奇瑞

陽気きへ所に所によつてかわりたるなにわ男有て参宮の御供妻三人
舞子ふたりかゝる道に末社とは恐れありとて。大この男五人去かたの
いはれぬ姿の娘。供なひて鈍子ちりめん。さあやりんずのいろぶとん。
のり物に敷ならべて。とをし馬あとより。三枚(八ウ)の八に喧嘩す
る馬子をなだめて。大津どまり芝屋町ぞめきつくせば。都より纒三
里のほとながら船頭馬かたになれし女郎の風。いやらしくふつゝ、かな
るさま。只酌とり酒の相手にし。のみあかして翌日はみなくち石部
とはかたひ名なれど。千びきの石も引にはいかてが。此たびの娘に夢
計の手枕なりと。かはさではと。そゞろ心の空になりて夜るをもや
すくいねず口説よれど。此娘まだいはけなく恋の山いくの、道。ふみ
もみぬ風情のとをらぬに夜もあけて。其又の日は松坂に昼とまりに
(九才)旅盃の五はい入に斗樽ひとつの前に酔心白昼に蚊屋つらせ。
手かけ五人大こ五人うちまじり。おもひくゝのたはふれ。主命なれば。
神もゆるしてと計。此心のかなしき娘にむりのなさいいひかけて。い



がつてん。川のざんざら柳の狸のひるねのはら(九ウ)

挿絵第十二回(十才)

つゞみ。どんくがらり。とんからり。爰なむすめがかたいも道理。
所も石部きんきちくやと。聞わけたる事ひとつもなく。さしたる脇
ざしぬいてふともゝをつらぬき。此心中いはれずと。手たゝいて笑ふ
に。人く驚きもとの駕にとりのせてなにわのかたへ送りと、けぬ。
今にはじめぬ。神明のあらたなる事。ま、多き事ながら。まのあたり
ちかく見しにぞ。我が国の神風残りてかゝるふしぎをも見聞しけると。
有がたくおほえし

④孝あれはしるしあり(十ウ)

一とせみの、国にいりて。不破野上関の藤川 乗 井青野などいふ
名所を尋行ば。むかし祇法師の

たび人の。みの打はらふゆふへには

雨にやどかるかさぬひのさと

とよみ給ひしさに至る。此所に何がしの平内とかやいふ百姓あり

天性慈悲ふかくして。よろづ正直の男なりしが家まづしくて朝夕



第十三図

の煙さへ絶く波のたちのやすからで。わたりかねたるとし月を送るともなく暮し行。此もの親に(十一才)孝ふかく一文不通のそれながら。鶏初て鳴比より先手あらひ口す、ぎ。かみけづりて。とくより老親の前に出て。御機嫌をうかゝひ。食物も先



第十四図

ふたりの親にすゝめ奉りて。自給仕し。御心をよろこばしめ我は残りし食物をくらいて。御いとま申て其身出

行て。野にたがやす。終日かくつとむる内にも老の身なればいかおはしますにやと。今日もおもひ入あひの。かねなる比に帰りては。夜のふすまのうすきをなげきて厚からん事をおもひ。かくつとめけるほどに。そひつれし女房も猶すぐれて又なき(十一才)孝をなしけり。極寒の雪のあしたには。隣の家にやとはるゝ身となりて。水汲づのわざに。わづかの代をとりて。ふたかたをやしなひ。三伏の夏のあつき日は。火をたくわざに。身を任せて此くるしさも身のためには一物もなく。身のをとろへるさまは。いはでたまづしくやしなひ奉り其事の足ざるを悲しみあひける。ある夜平内ふしぎの夢を見けり。

たとへば白髪の翁参りていはく。汝親に孝ある事至てたかく。昔の閻子曾子にもおとるべからず。此心ざし天に通じて今我(十二才)

挿絵第十三図(十二ウ)

挿絵第十四図(十三オ)

爰に来れり。今汝にあたふ物あり此草を門田に植よ月くくは苗生じて其味あはく。しかも不老不死長生の良薬是則天の芳草といふ物也。誠に水の流れば。行て帰らず。親去て二だひまみゆるなし。此義を知らで世に不孝におちあるもの多く浅ましくなげかし釈氏には恩重経残して父母の恩のはかりがたくたかく深き事をしらしめ儒家には又孝経を作りて世に孝行の道を教後夫婦心をひとつにして。猶孝の末をとぐべしと告給ふと思ひて夢さめぬ此ふしぎさ(十三ウ)臥たるあたりを見れば。あやしくめなれぬ草ありありし教のごとく。これを植るに。朧月にして苗生ひたり是をとりて老親にあたへ。其身も食するに。更に飢時をしらず顔色わかきむかしにかはり。聰明睿智にして鳥獸の鳴声き、わけ雲気をさつし。松風波の音。皆其耳にしたがひ。ふしぎあらはし妙をさとりけるほどに一在より其苗をぬすみて。うふれとも更に生せず是を煮てくらへども其しるしもなし。是より此至孝天に通じてふしぎある事。国の守(十四オ)聞しめして召よせられ在がたき録を給はらんと仰下されしかども辞してうけず。たゞ此苗を植てたのしみけるがいつとなく富さかへの家となつて。親も子もかぎりなき。長生の名をとり笠縫の親子翁とてめでたきためによぶとかやいひ伝へし

初音物かたり巻四終

宝永四歳

武州

万屋清兵衛

亥仲秋吉祥日

洛陽

西村市郎右衛門

梓行

(十四ウ)

〔解題〕

一 作者について

序者「白梅園鷺水」は青木氏(また山田氏とも)、通称次右衛門、別号に梅園散人・歌仙堂・三省軒など。万治元年(一六五八)生まれ、享保一八年(一七三三)三月二六日没、享年七六歳。元禄四年頃には京御幸町通二条上ル町に住し、俳諧点者としての活動が確認でき、『俳諧寄垣諸抄大成』(元禄八年九月刊)『俳諧大成新式』(同一一年二月刊)『和歌浅香山』(宝永四年正月刊)等の俳諧・和歌作法書や『万葉仮名

遣』(元禄一一年五月刊)『三才全書俳林節用集』(同一三年三月刊)『和漢故事要言』(宝永二年五月刊)等の辞書類の編集に携わる。

本書は後述するように『浅草拾遺物語』(貞享三年正月、洛下旅館序刊)の改題改竄本と称すべきものであるが、序文を初め新たに追補された本文もあり、それら新補部分の作者また本書全般の編纂者として序者鷺水が想定できる。署名に「潤色之」とあることは本書における鷺水のそうした立場を示したものと見えよう。

二 本書の内容構成

本書の構成を『浅草拾遺物語』との対比において示すと以下のようになる(なお、『浅草拾遺物語』巻四の四、『初音物語』巻二・三はそれぞれ欠丁・欠巻のため、両書の目録に記される各章題・付り等によって対応関係を推定した)。

『浅草拾遺物語』¹

『初音物語』

巻一

序文(削除)

(新補)

目録(削除)

(新補)

本文

- | | |
|------------------|---------------|
| 一 結捨たるわら小屋の跡(削除) | 一 (新補) 駒場村の勇女 |
| 二 友呼蛇の声に集る | 二 (改題) 吉祥院の神池 |
| 三 三年の馴染太夫松かぜ | 三 (改題) 遊君の貞節 |
| 四 向の岡の女仙人 | 四 (改題) 食を断女 |

卷二

一 其名計の女塚かな (削除)

(不補充)

二 瀬田の社の永夜の夢

一 (改題) 小太刀の感応

三 祖母が語し寺の昔や

二 (改題) 青龍ちまたを去

四 影を見知てねらひよる月

三 (改題) 月に名あり広沢

卷三

一 消て跡なき相撲取草

一 (改題) 逕行の法

二 恋を丸めて薬壳覽

二 (改題) 色に招る、女鳥

三 命の恩の仏蝙蝠

三 (改題) 身かはりの観音

四 雷落て松にあやしき

四 (改題) 農民蛇子を養

卷四

一 刀に石の仏つらぬく

一 (改題) 一念のやいば

二 発句に枯る草花のたね

二 (改題) 心より見る草花の妖

三 狂気出し伊勢の神風

三 (改題) 太神宮の奇瑞

四 富を潤す孝行の屋

四 (改題) 孝あれはしるしあり

次に『浅草拾遺物語』と『初音物語』の序文を挙げる (句読点や清濁、また傍線は筆者による)。

『浅草拾遺物語』

浅草拾遺物語序

年たけよはひかたぶきて万心ぐるしく、立居もやすからねど、老をたすけて業須まの若木もなく、よしや津の国のなにはの春も夢なれや、足に任せてと行ななかたへ行ば、露わけて草の枕

貞享参歳

寅 孟陽吉辰日

洛下旅館序

『初音物語』

序

をむすび、茂し木のもとに袖をかたしきては嵐がすゑの夢も
気疎、孤狼を友にし野犬に道しるべして、寒雨風雪の類に心を
いたみ身を勞し、いたらぬ国、みぬさともなく、漸々武州浅草の
流れしたひて、こまがた堂とかやにたちより、念珠しもて行ば、
水ぐきの跡かき流とよみし角田川の古し跡、名にしおふみや
こ鳥は有やなしやといと、詠はあかねど、末限なきたびと思
ふに心いそぎて、金竜山まつち山などよそながらそれと詠過て、
猶観音の宝前に詣。此御本尊のたときむかしは古き物がたりに
書つたへて、世もつて知るを、今更いひ出ても浅草からぬ浅草川
の浅しとや人はいふらんと暫、此世來世の事ねむごろに祈て、
かたへの茶店にやすらへば、八十計の翁の我にひとしき旅人、
おほく国をめぐりしとみえて、あるじの翁にむかひ宮古より初
て諸国にありこし事を物がたるに、旅のうさを忘れてうつ、なく
聞るれば、実惜べき秋の日の西の端山にか、り遠寺のかねほの
かに夕告る比、彼翁出て行がたしらず。我又旅店に帰りてあり
し翁の物がたりを覚えかき、くり返しみるに、今はむかしの物が
たり、祖父は山へ祖母は川へのたぐい、梓にちりばめて童部の
なぐさみ草の種、浅草拾遺ものがたりといふ物ならし。

秋の夜あかしがたく、おもふ事なき身にしも猶いねがてなるに、宿願しゆくほんの事ありて都の北に名高き鞍馬くらまにと出たつ心ひとつにこめたる願ひなればと、さそふ事なれば、此道このみちにつれもなし。七日とかぎりて先宿坊まっしゆくぼうにつきぬ。した、めなどよくして風呂ふろをあがりしかば、日くれて堂だうにのぼる。実げおこなひすましてもあらばかゝる山林さんりんなりけりとおもふに、内陣ないぢんのかたはらを引つくりて爰こゝにと道みちびくにかかせて、屏風べうぶなどのかたはらかこひたるに入りて念珠ねんじゆつまぐりつ、夜すがらゐたるに、田舎いなか順礼じゆんらいとおぼえてあら、かなる男四五人此寺このてらに参りしが宿なども取はづしけるにや、是も同じく外陣げぢんの椽えんに夜をあかしけるが、口くちに心こゝろにさままぐの事をはなしけるをおもしろく覚えて、帰かへりて一ツいつく書かて見るに、中ちゆうく座興ざきやうのたすけともなりぬべくおかしげなれば、やがて双紙さうしとはなしぬ。扱あつか是を初音物はつおんものがたりといふ事は聞きたびに珍めづしければと也。

白梅園鷺水潤色之

現存唯一の『浅草拾遺物語』(東北大学附属図書館狩野文庫蔵)は卷四卷末(十一丁以下)が欠丁のため刊記が不明ながら、同じく「洛下旅館序(「貞享二歳／＼孟春上旬」と署名される『宗祇諸国物語』の刊記2)から、京の書肆西村市郎右衛門(俳号・未達)を中心3に刊行されたいわゆる西村本であったことが予想されている。

また洛下旅館なる人物は未詳ながら、それを西村市郎右衛門の別号とする見解もある。ただし、先述した履歴からも窺えるように、それ

を鷺水の別号とすることは難しい。俳諧師として確認できるのは元禄期以降であり、後述するように浮世草子作者としての活動は宝永期を溯たどることはできない。貞享期の『宗祇諸国物語』『浅草拾遺物語』を習作時代の鷺水による西村本と見なすことも不可能ではないが、その可能性は極めて低いと言わざるを得ない。現時点では洛下旅館と鷺水は別人として扱いたい。

両書の序文内容を比較すると、『浅草拾遺物語』では浅草観音への参詣の後、茶店で休息する序者が居合わせた老翁から諸国物語を聞き、それを書き留めたのが該書であるという発端が記されるのに対し、『初音物語』では鞍馬に詣でて夜籠りする序者が田舎巡礼から聞き付けた種々の話を書き留めたということになっている。諸国咄としての物語設定のみならず、その詳細においても両書の共通性が見て取れよう。江戸浅草を表題とする『浅草拾遺物語』を「洛下旅館」が記すという発端はやや違和感を残すものの、そのことがかえって京の西村本に深く関与する江戸の書肆西村半兵衛の影響力を感じさせもする。その点で、鞍馬を発端の舞台とする『初音物語』は西村本としての不自然さが解消されているとも言えよう。もちろん改題改竄の作為が新刊を装うための商業主義的便法であったとしても、『初音物語』の序の内容が『浅草拾遺物語』のそれを意識した改変であったことは、京の書肆「西村市郎右衛門」の「西村本」が新たな段階へ移行したことを窺うかがわせる。事実、長く西村本の江戸相板元であった半兵衛店の名は『初音物語』には刻ま3れず、江戸の万屋清兵衛が名を連ねることになるのである。

三 浮世草子作者鷺水

これまでに知られる鷺水の浮世草子を『初音物語』も含めて記すと以下のようになる。

○宝永三年正月

『御伽百物語』 大本六卷六冊

「宝永三^丙年正月吉日／江戸 林和泉掾／寺町通松原上ル町／京 菱屋治兵衛／開板（両店に跨る）」

「廣告「諸国因果物語 全部六卷 跡より追付出来」

○宝永四年三月

『諸国因果物語』 大本六卷六冊

「宝永四^丁年三月吉日／書肆／江戸日本橋南一丁目／出雲寺四良兵衛／京寺町松原上ル町／菱屋治兵衛／板行（両店に跨る）」

「廣告「近代芭蕉翁諸国物語 全部六卷／近日出来申候」

○宝永四年八月

『初音物語』 小本四卷四冊

「宝永四歳^亥／仲秋吉祥日／武州／万屋清兵衛／洛陽／西村市郎右衛門／梓行」

○宝永五年正月

『古今堪忍記』 大本七卷七冊

「宝永五年^子／正月吉祥日／江戸日本橋南巷丁目／出雲寺四郎兵衛／京寺町松原上ル丁／菱屋治兵衛／板行（両店に跨る）」

○宝永六年八月

『新玉櫛笥』 大本六卷六冊

「岩宝永第六竜次己丑歳／仲秋之月既望／雑陽書肆／中川茂兵衛／西市右石衛門／板行（両店に跨る）」

○宝永七年三月

『吉日鎧曾我』 大本七卷七冊

「宝永七歳^寅／三月吉日／江戸書林（空白）／京書林／丹波屋茂兵衛版／同／西村市郎右衛門版」

○正徳・享保年間（享保三年頃までに刊行か、『濟帳標目』に同年（九月頃か）絶板）

『高名太平記』 大本十卷十冊

「京寺町通御池下ル町／芳野屋徳兵衛／板行」（ただし、無刊記本あり、そちらが初印本か）

現在確認できるところでは、宝永三年正月刊『御伽百物語』が鷺水浮世草子のデビュー作となるが、刊年不明の『高名太平記』を除けば、その活動は宝永期に限られる。その要因としては鷺水の後ろ盾であったと推測される北条団水の死去（宝永八年正月八日没）や当時の作者・書肆をめぐる浮世草子界の動向等の影響が予想されるが、詳細は別稿を期することとし、本稿では浮世草子作者鷺水における『初音物語』刊行の意味について確認しておきたい。

浮世草子作者としての鷺水の活動を考える際、これまで宝永六年八月刊『新玉櫛笥』の発刊を契機として前後に二分する見解が示されて

いた。それはデビュー作『御伽百物語』が京の書肆菱屋治兵衛の単独板であったことが示唆するように、その後も主板元となっていた菱屋と鷺水とのそれまでの関係性が変化し、『新玉櫛笥』以降は菱屋に替わって西村が登場することに着目するものであった。鷺水の菱屋からの離反に両者の確執を推測し、書肆の交代劇に書肆菱屋に主導権を握られた作者鷺水の創造的自由の回復を見出すのである⁶⁾。

もちろんそうした、言わば作家の主体性に板元変更の要因を見ることは不可能ではなく、考慮すべき重要な問題ではある。しかし、『初音物語』の出現は更なる視点をもたらすことになろう。菱屋との決別の書と見なされてきた宝永五年正月刊『古今堪忍記』の刊行以前に西村との交渉が確認できたことは、鷺水と菱屋・西村をめぐる交代問題に作家的主体性や確執と言った個人的・感情的な契機には還元できない要因を推測させることになる。『初音物語』は『浅草拾遺物語』の改題改竄本であり、そこに作家の創造的自由を見出すことは困難である。『初音物語』は西村市郎右衛門の「西村本」強化・リニューアル化、換言すれば新生「西村本」の嚆矢となる作品であり、主導権はむしろ西村にあったとすべきなのである。交代劇には菱屋に対する否定的要因とは別次元の要因が、鷺水には存在したことを示唆する。

宝永四年八月の時点において『初音物語』が鷺水による西村本として刊行されていた事実は、「其磧・一風競争期」と称され、それぞれ⁷⁾の作者を後援する京の書肆八文字屋八左衛門・菊屋七郎兵衛の代理競争としても語られる宝永期の浮世草子界にあって、鷺水の活動がそうした二大勢力の構図と無縁ではなかったことを示すことになる。同

時に八文字屋・菊屋の華々しい活動の陰に隠れてほとんど顧みられることのなかった宝永期の西村市郎右衛門の活動が同時代の動向と深く連関したものであったことを物語る。具体的には反八文字屋勢力の一角として鷺水・西村が団水と連携した動きを示すことになるのだが、詳細は先述したように稿を改めて考察したい。

注

- (1) 湯澤賢之助氏『西村本の浮世草子』（新典社、平12）所収の影印によるが、適宜『西村本小説全集 下巻』（勉誠社、昭60）を参照した。以下の引用も同じ。
- (2) 「貞享式^次曆^乙丑／正月上澣日／神田新革屋町／西村半兵衛／京師三条通／西村市郎右衛門／同八幡町通／坂上勝兵衛／刊行」。
- (3) 『日本古典文学大事典』（明治書院、平10）「浅草拾遺物語」（中嶋隆氏執筆）。
- (4) 注(3) 同書「宗祇諸国物語」（太刀川清氏執筆）等。
- (5) 『格致余論諺解』（元禄九年龍次丙子春三月穀旦／帝畿書舎／六角通西洞院西入町／西村市郎右衛門／烏丸手洗水町／同氏九左衛門／武江書坊／神田新革屋町／同氏半兵衛／蔵版（三店に跨る）を最後に半兵衛の刊行書は見られなくなる（中嶋隆氏『初期浮世草子の展開』「二章・一」若草書房、平8）。ただし、塩村耕氏『近世前期文学研究』（若草書房、平16）所収「付録 近世前期江戸の出版界について」には、半兵衛の刊行書として『万病回春指南』元禄12（京、西村市郎右衛門と合）とあるが、

当該書は未確認である。

- (6) 藤川雅恵氏「鷺水浮世草子の特質とその板元」(『江戸文学と出版メディア』笠間書院、平13)。
(7) 長谷川強氏『浮世草子の研究』(桜楓社、平3)。

(二〇一五年九月二十九日受理)

(ふじわら ひでき 文学部日本・中国文学科教授)

本研究はJSPS科研費26370242の助成を受けたものです。